

サムライ・平和 第20号 立ち読み

特集

戦争をしない人類史をもとめて

四拾壱年前の惨禍

井上國男

特集

戦争をしない人類史をもとめて

恒久平和実現の要件

いのちの一つ（数えられないもの、数えてはいけないもの）

一人だけの幸福を求めても、こわれる

一国だけの平和を求めても、事は成らない

だから —————

生者だけの幸福や生き残りを考える平和運動は片手落ち

だから —————

一つの命（生者と死者）がそっくり救われる道を求めよ

その方法は —————

先ず、戦争で死んだ者達を皆生き返らせよ（瞑黙させよ）

その方法は —————

死者が最も憎む戦争を地上から無くせ

戦争は人類最大の犯罪（集団殺戮の繰り返し）

これを無くす方法は唯一つ

あなたの手から（地球人すべての心から）武器を消せ

その方法は？

桑原啓善

(四拾壹年前の惨禍)

四拾壹年前の惨禍

井上國男

(井上國男)

叔父故井上國男(行年86歳)の手記です。平成22年7月29日他界。私がまだ若い頃に叔父から託されていて、そのまま長い年月の間、しまい込んでしまっていました。叔父の手記の場がございましたら、幸いに存じます。

(2022年5月21日 牟田むつみ)

戦争が可烈になり、従来徴兵検査は二十才であったが、昭和十九年、一年繰上げ十九才で徴兵検査を受ける。

昭和二十年五月、佐世保鎮守府針尾海兵団に衛生兵として入団する。海兵団に於て、普通科の訓練を受ける。普通科を二ヶ月の特訓に依り終了、其の後広島島の賀茂の衛生学校に行くことになっていたが、戦局は益々可烈になり、制空権は連合軍の手中にあつて、兵隊が汽車で移動することは、危険であるとのこと、佐世保の海軍病院で、衛生兵の普通科練習生として行くことになっていた。

佐世保に移動する前に、爆撃をさけるため、川棚の魚雷工場の疎開作業に五日間の予定で応援に行った。梅雨時で、連日の雨、泥道を四km―五kmの道を、一人又は二人がかりで、魚雷工場の材料である砲金を運んだ。重くて肩にずしりと喰込んで、辛い作業であつた。兵隊も、徴用者も、工

員も、雨の中泥道を必死に運んだ。

二日目の夜、空襲で、佐世保が爆撃された。「海軍病院もやられたらしいぞ」……「俺達は何処に行くんだろう。」と口々に話していた。

作業は三日目も黙々として続けられた。

四日目の朝、突然！「針尾海兵団に帰る！」との命令があり、元気なものは行軍、病気の者はダイハツ船で針尾に帰った。と其の夜、川棚の魚雷工場内の吾々兵隊が寝泊して居た、屋舎が爆撃されたとの報せがあつた。「オイ！俺達助かったなア。」と、戦友共々に無事を喜んだ。

其の後、佐世保に行かなくなつた、十一―十四衛練分隊は、二つに分かれて、教育を受けることになり、吾々十一―十二衛練分隊は、大村海軍病院へ、十三―十四衛練分隊は、嬉野海軍病院へ、と別かれて移動した。

大村海軍病院で普通科練習生として、看護学や

必要な軍事訓練、法規の勉強等の特訓の毎日が続く、七月の日々、暑い中の特訓である。其の間にも連日の様に、日本のあちらこちらで空襲がある。大牟田市もその頃の夜、焼夷弾攻撃で全滅の報をきく。

夜は病棟の保安直、注射の実習等、一日が矢の如く過ぎ去る。空襲は益々烈しくなる。其の度に防空壕に避難することも多くなる。避難も負傷兵を誘導し乍らの避難である。其の度に負傷兵は、吾々衛生兵に感謝してくれた。吾々も亦、懸命にいたわるのだった。

日は過ぎて八月となる。毎日看護学科、実習の勉強が続く。

そして八月九日、午前十時から十一時迄、諸法規の勉強である。十一時頃から食卓番は、食事の用意に放炊場に行く。其の他の者は自習をするのである。其の自習の合図に教官が「温習にかか

れ！」の合図と同時に、西の窓の方向に閃光がした。其の閃光は写真を撮る時の光圧を感じた。（大村―長崎距離直線約二十㎞）時十一時二分である。

吾々は西の窓際に走り寄り西の空をみる。雲一点なく、じりじりと照り晴れ渡った紺碧の西空、長崎の上空である。そこに、きのこ雲が姿を大きくしながら上昇していた。（きのこ雲は夏独特の白雲の中が茜色にめらめらと燃えて外部にボケて、それは美しい雲であった）窓際に走り寄った兵達、それは美しい雲であった、アレは何んだ」と、異口同音に云いながら見ていたら、ガ！ガ！ガーン！と爆発音がして今にもガラスが破れんばかりの音、振動であつた。「之は大変！ 大変！ 直ちに待避！待避！」と叫んで、病棟の負傷患者を誘導し壕に避難する。壕の入口から其のキノコ雲を見て居るとB 29が左旋回上昇していた。其の左横遙かに離れたところに、ピンポン玉位の白い玉が浮いてい

た。其の玉をみて、「又あれが爆発するんじゃないか？」と、おののいてみていた。

此の出来事は空襲警報が解除されて警戒警報時の出来事であつた。その美しいキノコ雲が、あの恐ろしい原爆であつたとは……其の時は知らされていなかったのである。

(註) (ピンボン玉位の浮遊物は終戦後〇〇年〇月ラジオ放送の終戦秘話で聞いたのであるが、米国の科学者が日本の科学者に送った通信筒であつたとのことであつた。内容はよく知らないが、戦争を止めなさい！でないといふこんな悲惨なことになるとの警告であつたらしい)

其の後警報も解除されて平常に戻る。

海軍病院では午後八時になると、「火の元点検吊床降せ！」とスピーカーで報ぜられ、警備当直以外は就寝である。夏は未だ明るさがある。私たちの兵舎は病院であるため、ハンモックではなく、畳一枚大のベッドで蚊帖も一人一人のものであつ

た。初め教班長が「貴様達の寝台、其の他、手箱、

必需品入れは、兵学校並みのものだ！ 有難く思え！」との事だつた。その夜(九日)午後八時の吊床降せ！の報で、毛布をしき蚊帖を降して床につく。未だ暗れやらぬ景色に眠れず、戦友とヒソヒソ話し、ひる間の出来事が余りに大きな出来事であつた為、皆な直感して居た。「オイ今夜、総員起しがなければいいがなア！」と云つて話をして居た。が、毎日の猛訓練に疲れてか、何時のまにか眠りこけていた。と其の時、案の定：「総員起し。庁舎前集合！」、「総員起し。庁舎前集合！」。スピーカーで緊急命令である。そろきた！吾々十一分隊、十二分隊、馳足で庁舎前に集る。時午後十時であつた。軍医、下士官、従軍看護婦、手のあいて居る者全員である。

所轄長〇〇少将から緊急指令である。

「本日午前十一時二分、長崎に、原爆が投下さ

れ、爆心地市街は全滅である。只今から、軍人、徴用、一般市民、雇用者を問わず、被災者が、此の大村海軍病院に入院治療をする。直ちに分担を決め、治療にかかれ！ 間もなく患者が、病院に到着する。」との命令である。私は十一分隊で翌、午前二時からで、十二分隊は兵舎に戻らず、其のまま各病棟に分かれ治療にかかる。

私達十一分隊は馳足で兵舎に戻る。途中、もうすでに患者を載せたトラックが燈火管制の暗の中に、四台五台と到着していた。患者の呻き声、泣き声、アイゴアイゴの泣き声は、一きわ大きかった。その呻き声、泣き声を後にし、兵舎に戻り床につく。眠りも、そこそこに、交替時である。五分前に起され、指令された病棟に行く。各病棟、治療を受ける患者の列で一ぱいだ。先ず病棟の入口で海軍の洗濯スタップ（桶）にシヨウコウ水の一%液が一ぱいに容解されている。下士官が指揮

をとり、満員の患者を次ぎ次ぎに、兵士も一般市民、女、子供！ 泣き叫ぶ朝鮮人！ 呻く重症患者！ 軽傷患者！ 背中一面に母指大の負傷兵！ 顔面火傷で、ノッペラ棒のようになった若い女性の顔！ 口唇や、其の他の粘膜が爆風で脹れ上った患者！ 呻く、泣く、修羅場そのものである。

其の夜は、それぞれの患者を、その昇永水で患部を消毒して病室のベッドに寝かすだけがせいっぱいだった。未だ次々にトラックで燈火管制したの暗を患者が送られて来る。

（註）（交替時に十二分隊の兵から聞いたのだが、燈火管制下の、真の暗でトラックから患者を担架に載せる時、半身火傷の患者を、何人も車から取り落した由。火傷部の皮膚が剥がれ手からすべり落ちたのである。）

火傷は医学上、四ツに分類されている。第一度火傷、第二度火傷、第三度火傷、第四度火傷であ

る。第一度火傷はヒボクラメ位、第二度火傷は赤くなって、皮膚が剥がれる位、第三度は糜爛性、第四度は真黒焦である。

大村の海軍病院に送られて来た患者は殆んど第二度火傷から第三度火傷に近い患者が多かった。半身裸体の人は腰から上全部、白いシャツを着て居た人は露出面、白いランニングを着て居た人は、白い面は火傷せず、丁度太陽に当り露出面だけが焼けて形が出来た様。無論顔は全面！ 又は半顔！ 一部！と、様々の火傷である。

送られて来る患者が一段落する頃、夜は白々と明けてきた。八月十日である。病室は呻き声！ 泣き声！ 兵隊さん！ 水！ 水！ 水下さーいと、息絶々に叫ぶ声が続いている。

朝食を済まして、消毒だけで入院した患者の治療が始まる。軍医の治療介助をする。火傷の患者に施した治療は火傷薬のマグロイドとゆう白い乳

液を患部に筆で塗り、其の上に、リバノール液（消毒液）に浸したガーゼを張りつける治療であった。軍医も衛生兵も少なく治療が一日では間に合わない状態であった。

半身裸で背に、母指大の傷のある兵が蒼白な顔で苦しそうな表情をみて、軍医と治療にゆく。「夕夜昇汞水で消毒したままの傷が痛んでどう仕様もない」と、懸命に堪えて居た。背中一面の傷を調べると、中に硝子の小さな破片が、ザクザクと入っている。其の傷の中の硝子の破片を探子でかき出すのである。患者は蒼白な顔に生汗をかいて激痛に悶えていた。

吾々は午前中で十二分隊と交替である。午後は学科や実習の特訓である。空襲警報は連日である。

十一日、十一分隊一教班、二教班より、各四名計八名が、教班長に連れられて、食糧庫に行った。何事だろうと思っていたら、海軍の乾パン九ツ穴